

『鷲林拾葉鈔』記事対照表（四）

渡辺 麻里子

〈凡例〉

一、記事対照に使用したテキストは以下の通りである。

『鷲林拾葉鈔』

……日光山輪王寺天海藏写本

・参照、蓬左文庫藏写本、檀王法林寺藏写本

・慶安三年刊、版本（『法華経鷲林拾葉鈔』 臨川書店 一九九一年）

・翻刻『増補改訂 日本大藏経』第二四卷・二五卷、法華部章疏四・五

『一乗拾玉抄』

……叡山文庫天海藏写本

影印、中野真麻理『一乗拾玉抄の研究』（臨川書店 一九九八年）

翻刻、中野真麻理「叡山文庫天海藏『一乗拾玉抄』（卷一）翻刻」

（『国文学研究資料館紀要』二二五号 一九九九年三月）

『轍塵抄』……………日光山輪王寺天海藏写本（八本）（永祿四年（1561）舜雄写、七冊本）

・参照

・叡山文庫天海藏写本。

・高野山図書館三宝院寄託写本、書写年次不明、延深とあり。

『法華経直談鈔』……………叡山文庫金台院藏写本（『法華経直談鈔 古写本集成』 臨川書店 一九八九年）

・参照、寛永十二年（1635）刊、版本（『法華経直談鈔』 臨川書店 一九七九年）

一、テキストの配列は上より、『鷲林拾葉鈔』、『一乗拾玉抄』、『轍塵抄』、『法華経直談鈔』である。『一乗拾玉抄』の成立は、『鷲林拾葉鈔』より先行するが、『鷲林拾葉鈔』を軸にするため、『鷲林拾葉鈔』の下段に据えている。紙数を減らすために、段の高さを適宜変えているが、配列順はそのままである。

一、一段め、『鷲林拾葉鈔』の見出しは、日光山輪王寺天海藏写本の一つ書きの項目で、「1」「2」「3」として通し番号をつけた。また参考として、版本の見出し（巻頭ごとの目次による）を添えた。

一、二段め、『鷲林拾葉鈔』の記事は、見出しの一つ書きごとくに、さらに記事を細目に分け、それぞれ出現順にABC……と記事に通し番号をつけ、記事内容の大略を示した。また、第二十八番以降はアイウ……で示した。記事の内容は、逐語訳を目指した。テキスト間の比較の都合上、なるべく簡略にしないようにした。

一、本文における引用について、例えば「記三云……」の場合は、「記三に云う、」とせずに【記三】と略している。

一、三段め『一乗拾玉抄』以下については、記事内容が『鷲林拾葉鈔』の記事に大略同じである場合は、『鷲林拾葉鈔』の記事符号ABCを以て示した。

一、記事内容が、『鷺林拾葉鈔』の記事に大略同じでありながら、内容にいくらかの差異・特徴を有するものは、『鷺林拾葉鈔』の記事のバリエーションと見なし、『鷺林拾葉鈔』の記事記号ABCに対応してA₁B₁C₁等の記号を用いて出現順に示し、異なる内容を簡略に示した。

一、『鷺林拾葉鈔』にない記事については、出現順にabcの記号を付して示した。以降の段でその記事のバリエーションと見なせる記事には、前項と同様にa₁b₁c₁の記号を付した。

一、『鷺林拾葉鈔』に対応する記事が、外の一つ書きの項目の中にある場合、その旨を記し、各記事の対照は、『鷺林拾葉鈔』の該当記事に対応させて記した。

一、『一乗拾玉抄』以下の諸本については、各々一つ書きに通し番号を付し、記述の順がわかるようにした。

一、人名の表記は、通称はそのままに、略称は適宜改めた。

一、書名の表記は、なるべく原文のままとし、「此経」など、文脈に照らして補う場合は『法華経』など、通用する略称を用いた。

一、和歌は、『鷺林拾葉鈔』では一首全部を掲載し、(1) (2) (3)として歌番号を付した。『一乗拾玉抄』以下は、対応する歌番号を示し、語句の異同を示した。

*この記事対照表の作成にあたり、記事対照の方法を、市古貞次編『平家物語研究事典』(明治書院・昭和五三年)所収「平家物語諸本記事対照表」を参考にした。

◆序品第一之一(4)

項目	『鷲林拾葉鈔』	『一乗拾玉抄』	『轍塵抄』	『法華經直談抄』
<p>〔28〕序品第一事 一四、序品第一事</p>	<p>〔28〕序品第一の事。 A、【疏】序は庠序と訓ず。謂階位賓主問答は悉く庠序である。教家は義に従う。謂次由述なり。是の如き等五事、經首に冠するは次序なり。放光六瑞起発の端たるは由序なり。問答釈疑正説の導引たるは述序なり。この三義を具す故に稱して序と為す。</p> <p>B、序字を庠と訓ずるは、つまびらかと読むなり。</p> <p>C、階位は声聞・菩薩・雜衆の次第なり。羅漢歎徳の五句、菩薩稱揚の十三句等の階位なり。</p>	<p>A、(58)、一、序に付きて、字訓・字義の二意、これ有り。【疏一】一に、品の来意を明かす。二に、品の題目を明かす。謂く、序とは、一に字訓、庠序と訓ず、次の第一なり。二に字義、是に次由述の三の序あり。此の如き等の五事、妙經の首に冠る次第なり。放光の六瑞は発起の由序なり。問答釈義は正説の弄引述序なり。此三義を具す故に、序品と稱して、此の品初めに在り。其の義、自ら三分の章句を頭すと謂う。</p>	<p>×</p>	<p>A、(20)、一、序の字の事。序に於いて、多釈これ有るとも、先づ、次・由・述の三義なり。先づ、次序とは、次の字はハシメト云う心なり。其の故は、如是我聞等の五義は、一經の初めなる故に、次序となり。次に由序とは正宗に至りて説くべき事の由来なり。夫れとは天雨四花、地動六瑞等の多くの瑞相を現する事は、正宗にて説くべきことの由来なれば由序なり。次に述序とは、文殊・弥勒の問答なり。</p>

<p>D、賓主問答は二聖の問答なり。文殊は極方の大士なれば、客人の如く賓なり。弥勒は此の土の補処の菩薩なれば主なり。此の如く等事、詳に序する故に、庠序と云うなり。</p>	<p>a (51)、序とは、興起由来を顕すなり。 b (51)、譬は城郭の堀壁の如く、法華の体は諸法実相なり。是、十界を常住と顕し、先、表に四花降り、大地六種に振動するなり。 * (51) ↓ [29]</p>	<p>m (20)、其の故は、弥勒は四花六動の瑞相を見て、一会衆の疑念に替わつて文殊に對して、これは何事ぞと問ひ玉うなり。其の時文殊答えたまう様は、昔、灯明仏の時法華經を説き玉う時は、先づ此の瑞相が有るなり。今仏も法華經を説き玉うべき故にや、此の如き瑞相が有るなりと、述べ玉う故に述序と云うなり。</p>
<p>E、經家が義に従うとは、次・由・述の三義なり。通序五義は一經首に在る故に次序なり。次の字ははじめと読むなり。地動放光等の瑞相は、正宗の由来成る故に由序なり。由の字はもとと読むなり。二聖の問答は正説の事をあらま</p>	<p>c (57)、一、次由述の三義の事。【義】朝日の出んとしたまう粧いは次序、はや光用出るは由序、日体の出てたまう所は述序なり。 d (57)、夫れの如く同聞雜衆一会に座する所</p>	<p>l (29) 文句には、次由述の三義を以て、これを消す。次とは通序の始めに如是等の五義を次第する是なり。由とは六瑞を現ずるは発起の瑞なれば、由序なり。述序とは、文殊弥勒の</p>

し決撰の故、述の義なり。

は次序、四花六瑞は由序、二聖問答は述序なり。

e (57)、【一義】次序とは通序を指す。如是我聞と置くは、妙法等の題号の次序と云う意なり。

f (57)、【一義】次の字をばハチメと読むなり。方便・譬喩等の始めの序と云う意なり。

g (57)、次由序とは由来興起の義なり。是は正宗にて、六番破惑四仏知見を顯すべし。先表に天より四花降り大地震動する。是を由序と云うなり。

h (57)、次述序とは、文殊弥勒の問答なり。

i (57)、【一義】由序とは、寒風由来と成りて雪降り、述序とは人風

問答是なり。正く正宗の妙法を粗これを知る故なり。委は下の如し。

<p>F、【有人】外典中、序の字を糸口と読むなり。</p> <p>G、是はじめの義なり。世間の糸の口より次第に引き出して、其の用を足る如く、糸のはじめを糸口と云うなり。</p> <p>H、序の糸口を引き出して正宗の用を足すなり。</p> <p>I、或いはツグという読みもある。瑞相を表し、正宗を次ぐのである。</p> <p>J、所詮法華の序は一心不生の本源、法界縁起の内証を序と云う。機法未分の法体、止不須説法我法妙難思の重なり。</p>	<p>の吹くを聞きて此の風の吹き様は、何様の雪降らんと云う。此等は述序の意なり。</p> <p>j (57)、【釈】序母正宗の子を生む。</p>
	<p>F₁ (52)、序の字の訓点をば作典には糸口と云へり。</p> <p>k (52)、針に糸をとおさんとて口を作るが如きなり。</p>
<p>×</p>	
<p>×</p>	

〔29〕惣体付経論
序四種有之

〔29〕総体、経論の序に付きて四種あり。
A、一、帰敬序。論釈を造り、疏釈を製し、三宝に依りて冥加を被るを請うなり。
B 【天台観心論】 帰命龍樹師。
C 【山家頭戒論】 稽首十方常寂光常住内証三身仏。これらの義なり。
D、二、証信序とは、諸経の同聞衆を列る心である。阿難尊者は、我独聞にあらず、一会大衆と俱に聞く故に、誤り無き事を顕すなり。自余大衆を証拠人に立てるなり。
E、三、発起序とは、現瑞表彰し、地動放光する等なり。
F、四、奉讃序とは、正宗の増を挙げ、称揚讃歎を云う。玄義・止観等の序の如し。この四聖足も経あり。又一二の有るも有る。今の経は但、証信序・発起の二序計り有る。

a (53)、序に四の序あり。一に帰敬の序。二に証信序。三に発起の序。四に奉讃の序なり。
A₁ (53)、先づ、帰敬の序とは、一切の論釈を作るには、祖師の恩徳、我が特尊の加被を得るとして先づ最初に祖師の特尊等を挙ぐるなり。
B₁ (53)、されば天台観心論を作りて発端の句に帰命龍樹師と置くなり。
b (53)、さて証信序・発起等は上の如し。
c (53) 四に奉讃の序とは能説の教主を讃るなり。

×

A₂ (21)、此の序に付きて、四種の序あり。一には帰敬の序と云うは、論をも作り釈をも作る時、序を書くに先に帰て三宝に依りて此の作る所の諸釈を守護し玉へと云う心なり。
B₂ (21) 【天台の観心論の序】 帰命龍樹師と云い、
C₁ (21) 【山家の頭戒論の序】 稽首十方常寂光常住内証三身仏。此等なり。
D₁ (21)、二に、証信の序とは、同聞衆を列る事なり。阿難尊者の諸経を結集し玉う時、我独り聞くにあらず、一会の大衆と俱にこれを聞く。故に誤りあるべからずと云て、自余の衆を証人に立つるを証信の序と云うなり。
E₁ (21)、三に発起の序と云うは、正宗の内証を序にてあらあら引き起こす意なり。
F₁ (21)、四に奉讃の序とは、正宗の事をあらかじめ挙げて、称揚讃歎するを云うなり。玄義・

<p>G、【一処釈（外書爾雅）東西の壁を名付けて序と為す。壁を見て舍宅の浅深を知り、序を見て正宗の浅深を知ると云う。</p> <p>H、【安居院澄憲法印の文章】序文の鼓を撃ちて正宗の舞袖を翻す。譬は田楽・猿楽等の舞は台を蔽り、鼓等を鳴らして人を催す等は序なり。既に歌舞に及ぶ処は正宗なり。</p> <p>I、此又東陽の五部九卷の書に見ゆ。総体萬事に亘り、この心有り。雪降らんとて風寒し。雨降らんとて雲起こる等皆これ序なり。</p>	
<p>G¹ (51)、されば序の体を妙楽爾雅の文を引きて釈する時、東西の垣是を序と云う。序を以て正文を知り、壁を見て舍宅の浅深を知り、釈して人の四方のかきを見て舍宅の浅深を知るが如く正宗の深意とは序に顯すなり。</p> <p>I¹ (51)、されば序と云うは、雨降らんとて雲起き、日出んとて明星先に出て、白雲起ちては日照り、赤雲立ちては風が吹く如し。</p>	
<p>G² (29) 一、序の事。爾雅には、東西の塀を序と云う。』</p> <p>f (29) 郭撲が注に内外を別つなり。</p> <p>g (29) 孔安国が注に云く、序とは、作者の意を明かす所以なり。謂ゆる塀を見て、宅舎の浅深を別へ、序を觀て、述作の深意を知る。』</p> <p>h (29) 毛が詩の伝に云く、序とは緒なり。別に其の事を緒述す。理にして相影統せしむること、蚕の緒を抽るが若し。』</p> <p>i (29) 私に云く、爾雅</p>	<p>止観などの序の如し。此の四を邪正足たる理もこれ有り。又一つ二つ有る経もこれ有り。此の経には但し、証信の序・発起の序のみこれ有り。</p>
<p>G³ (22)、又【一処釈】壁を見て舍宅の浅深を知り、序を見て正文の幽旨を弁す。譬えば、人の家の四壁の大小を見て、家内の貧をも富めるをも知るが如く、序を見て正宗の浅深を知るなり。</p> <p>H¹ (22)、【安居院の澄憲法印の文章】、序分の鼓を撃ちて、正宗の舞袖を翻すと云われたり。譬えば、猿楽などの舞台を蔽りて先づ笛をふき、鼓を打ちて人の心を催す等は序なり。其の後既に歌舞す</p>	

<p style="text-align: center;">×</p>	
<p>d (54) 一、顯密序の事。密序と云うは、宝塔品の時、迹門の説畢りて機熟する故に、本門を説こうと思しめず時、宝浄世界より五百由</p>	
<p>k (30) 一、口伝云、序とは、如来の内証方法の惣体なり。機法未分</p>	<p>の文の如くんば、經論の序は自部他部の隔てなり。第四時の般若經の畢竟空寂の理を説き畢りて、今十如実相の妙法を顯さんと爲したまう始めなり。人家の垣に譬る、此の心なるべし。舍宅は正宗の如く、塀壁は序の如くなり。之に就きても、塀の高下粗密を以て自ら宅内の貧富貴賤をも知らるるなり。</p> <p>j (29) 權教は能詮所詮淺ければ其の序随いて尋常なり。実教は行人理教共に深ければ、其の序甚だ希奇なり。</p>
<p style="text-align: center;">×</p>	<p>るは正宗なり。</p> <p>I² (23)、惣じて万事に亘りて此の意これ有り。雪の降らんとて風寒く、雨の降らんとて先づ雲の起こる等、皆是序なり。</p>

<p>[30] 階位者</p>	
<p>A、一、階位とは、同聞衆の聲聞・菩薩・雜衆と次第する階位なり。 B、實主は實の字をマラウトと読む。その義は上の如し。或</p>	<p>旬の宝塔来る時、多宝は尽還集一処と説き、釈迦は悉已来集と云て分身来るなり。この時一会の衆、釈尊は古仏かと思ふ疑が是、本門の遠由なり。是を密序と云うなり。</p> <p>e (54)、一義に云く、釈迦・多宝は塔中に居し、分身は樹下に集まる事、寿量品にて秘密の三身を顕すべき序なれば、密序と云うなり。次に顕序と云うは、涌出品の時、我従久遠来○等衆と云て、弥勒の間を答する事は、本門にて我実成仏已来○久遠と説き、顕すべき序なればこれを顕序と云うなり。</p> <p>* (55) ↓ (45) * (56) ↓ (45)</p>
<p>×</p>	<p>にして未だ言説に及ばず、爰に以て經に云く、説大乘經名無量義○身心不同。』此の文序の内証にて有るなり。如来無量義処三昧に入りて、結跏趺坐して、一句も渣へざるを、而も、説此經已と云て、此經既に説き畢りぬと云えるは、如来の正く妙法を得たまえる所を説く此の經已と云うなり。此の内証の理、天地に叶う故に両花地動するなり。</p>
<p>×</p>	

	<p>いは、弥勒は発問の故に實なり。文殊は灯明の往事を引き、法華の瑞相を知らしめる故に主なり。互いに寶主の義通ずべきなり。釈に見ゆ。</p>	<p>〔31〕品事 一五、品之事</p>
	<p>A¹ (59)、品とは漢語なり。梵語には跋渠と云うなり。</p> <p>a (59)、【記一】四阿含の中の中阿含を引ききて釈するなり。</p> <p>b (60)、一、品の字をばしなじなと読むなり。一品の内に善ならば善のしな、悪ならば悪のしなを取り挙げ、品と題するなり。</p> <p>c (60)、されば方便為究竟の義を説けば、方便品と題し、此の品には序の事斗り説く故に、序品と題し、提婆が惡逆を説けば、提婆</p>	<p>一、品の事。 A【疏】品とは中阿含に跋渠と云う。この翻は品と為す。 B、品は義類同は聚めて一段に在る故に品と名づくなり。 C、義類同を聚めて一品の題号と為す。今現瑞問答正宗の序の故に序品と云うなり。</p>
<p>B² (24)、一、品の事。 【疏】品とは、義類同き者を聚めて一段に在る故に品と名づくなり。品を判すと云うは、一つシナナル事を取り集めて一つに挙げて、余事を交へざるを品と云うなり。</p> <p>e (24)、譬へば、世間の歌書などにも春の部には春を読める歌ばかりを入れ、恋を読む歌は恋の部に入れる等の如くなり。</p>	<p>A¹ (31) 一、品の事。梵には跋渠と云う。此には品と翻す。 B² (31)、品と云うは、義類同の名なり。義分の同じき物を引き調へて合聚する故に、品と云うなり。 d (31)、次由述の三義違々なれども、同じく正宗の為の序分なれば、序品と云うなり。之を以て以下の品の名を准知すべきなり。</p>	

<p>〔33〕 付置品題仏 自唱經家所置訳人 所置三不同有之</p>	<p>〔32〕 唵者</p>	
<p>A、一、品題に置くに付き、仏自唱と經家の置く所と訳人の置く所とに、三の不同有り。 B、仏自唱の品は、提婆・薬王の両品なり。同仏告の言の下、品名を挙ぐ故なり。其の他は、經家の置く所なり。經家の置く所は、阿難の事なり。 C、さて訳人の置く所は二十八品の内に無し。此の心を「疏」に、或仏の自唱品、梵網の如し。或結集は、置く所、大論</p>	<p>一、唵とは、 A、唵とは正宗。引とは序なり。 B、唵の字はモテアソフと読む。所詮唵と為すは引くと云うことなり。</p>	
<p>A₁ (61)、一、品に於いて、經家の置く所の品、訳者の置く所の品、仏自唱の品あり。 a (61)、或は、開品の得益、開經の得益と云云。</p>	<p>×</p>	<p>品と題するなり。 B₁ (60)、仍て品の字をば義類相從せり。これを名付けて品と為すと積せり。</p>
<p>×</p>	<p>×</p>	
<p>A₂ (24)、品に付けて、仏自唱の品結集は、置く所の品、訳は置く所の品と云う事これ有り。直談には、似合わざる故にこれを略す。</p>	<p>×</p>	

	<p>〔34〕序者一念不起本源</p>	<p>〔35〕二十八品俱仏説敷 一六、二十八品俱</p>
<p>の如し。或は訳人添足する、羅什の如し。今葉王品の事、これ仏の自唱、妙音・観音などこれ経家、訳人未だ聞かず。諸品の始めの故に第一と為す。</p>	<p>A、一、序とは一念不起の本源、品とは三千差の差なり。 B、桜梅桃李の分とも同一、妙法の差別する処を品と云うなり。</p>	<p>一、二十八品俱に仏説か。 A【籤二】始め如是より終わり而去に至る、仏説に有らざることなし。俱にこれ妙法なり。 B、同じく仏説と見る。但し序品は、文殊・弥勒の問答、信解品は四大声聞の領解なり。仏説に有らざるを見る。如何と云う時、推功上人の時、功を教主に推する心なり。文殊弥勒は如来の内証を得、一經發起を為す問答をしたまえり。 C、又四大声聞は仏意を深得して釈する故に</p>
	×	×
	×	×
	×	×

仏説と違わざるなり。

D【一義】分証仏界に約すなり。文殊弥勒の元より等覚の菩薩なり。四大声聞は初住に叶い、分けて仏智を得る。故に仏説云、相違無きなり。又化一切衆生皆令入仏道と説く故に、仏にあらざる衆生はこれ無し。悉く如来の金言なり。これ迹門の心なり。寿量頭本の後は、十界悉く無作三身の如来なり。この時は末代凡師の一句一偈の演説も、本地無作三身説法の故に、仏説と云い相違無きなり。

〔36〕二十八品表

示事

一、二十八品の表示の事。
A、或は千手二十八部衆。
B、或は二十八宿。
C、我等が両手の二十八節を表すなり。

A₁(64)、二十八品の表示の事。千手の二十八部衆を表するなり。
a(64)、是即観音法華の眼目、異名の意なり。委くは余抄の如し。

×

A₂(27)、一、二十八品の表示の事。千手の二十八部衆を表すと云い、
B₁(27)、或は、天の二十八宿を表すと云うなり。是即ち、衆生の本命星なる故なり。
C₁(27)、衆生に約する時は、我等が両手の二十八節を表するなり。

h(27)、さて文字の数は、六万九千三百八十余字なり。開結の二經を合すれば八万四千なり。我等衆生の八万四千の煩惱を即菩提の妙理と説き顯す經なる故に、文字をも八万四千と定めたるなり。又、

[37] 第一事

一、第一の事。
 A、【疏】諸品の始め故に言いて第一と為す。
 B、二十八品始故に第一と云うなり。実に、二・三に対して第一と云うにあらず。法華の最も第一なり。三説超過の経王にして諸経最頂なるを第一と云うなり。
 C、已上九字は秘教を約せば、

A₁ (62)、第一とは、衆品のはじめなる故なり。
 a (62)、されば一の字をハシメと読み、第の字をはツクと読むなり。是即ち次第の意なり。
 b (62) 【釈】第は次第に居く。

f (32)、一、第一とは、審諦なり。明らかに二十八品の次第を察して品の前後を分かつ故に第とは云うなり。
 B₁ (33)、一、一とは数の始めなり。則ち序は二十八品の始めなり。
 g (33)、私云、釈名大概畢る。

A₂ (25)、一、第一の事。第一とは、首次の初めなり。是即ち二十八品の始めなり。
 a₁ (25)、一字をは始めと読むべきなり。
 h (25)、私に云く、第の字をもハジメと読むなり。此の第の字を平声に読むは始めと読む

衆生の毛孔が八万四千有るなり。此の一一々の毛孔毎に各の小虫有り、成仏の時、色心の二法を妙境妙智と開けば、八万四千の小虫、即ち各の金色の仏体と成るなり。是が法華経にては八万四千の文字即解脱なり。是を釈すに、一々文字皆金色仏と釈する。其の体これ同じ。又、法界の最初は、八万四千歳の壽命なり。又須弥山も地上より上、八万四千由旬、地下も八万四千由旬なり。皆是其の表示これ有る故なり。所詮、依頼も正報も、終には一体にして、一妙法の悟り開くる故なり。

〔38〕 第三入門判

A、一、第三に入文判釈に付き、

×

B₁ (36) 一、三段本抛

A₁ (28)、第三に、入文

胎藏八葉九尊・金剛界の九会
曼陀羅なり。已上釈名畢る。

c (62)、根本大師は第
とは始めに居く。一と
は始めなりと釈せり。

d (62)、実には二に対
し、一にはあらず。独
一法界の一なり。

e (63)、一、題号の九
字なる事は、九教えを
表す。或は、生死の九
界を出る事を表すな
り。

C₁ (63)、或は真言には
九会の曼陀羅、八葉九
尊を表すなり。

* (64) ↓ [36]

み、去声に用ればをは
りと読むなり。故に巻
の初めに有るをば何れ
も平声を用い、巻の終
わりに有るをば去声に
用いるなり。

B₂ (25)、【一義】第一
とは、実には二・三に
対する一にはあらず、
法華最第一なり。其の
故は、三觀超過の經理
なる故に第一と云うな
りと云云。

C₂ (26)、一、法華經の
内題外題に付きて、顯
密一致に習う事、妙法
蓮華經序品第一の九字
は、金剛界の九会曼茶
羅に当て、外題の八字
は胎藏界の八葉と見た
るを法華の曼陀羅觀音
の儀軌に見えたり。

釈付分序正流通三段事常義也

序正流通の三段に分かつ事常の義なり。

B、夫れに取りても、三段の分別は、震旦に道安法師と云う人の立つ所なり。有る時、帝王貴僧を請いて楞嚴を讀ぜしむ時、經の文段を分ちて講じ玉うと云云。彼の僧之を知らず。即時道安法師、一切諸經に亘りて序正流通の三段を分別し玉へり。証拠無きに拠りて、人は之を信じず。其の後、天竺より親光菩薩造たる所の仏地論將來す。彼の論に起教緣起分・正教正説分・歡喜奉行分として三段を分別するなり。其の時、さては道安法師は仏意に通じ、菩薩の造る所にも応帳せりと云て、天下之を信ず。其の名称して一天に弥る。故に弥天の道安と云うなり。

の事。前秦以前は諸經論に義文無し。弥天の道安已來、序・正・流通の分別出來す。秦王符堅、僧に命じて楞伽經を講ぜしむるに、彼の僧、平讀して分節を知らざりき。其の時符堅の云う、朕聞く、佛法の玄嚴經文の奥蹟實主起復し師資答問す。故に必ず次序有るべし。何ぞ直解して科段の例無きかと云云。諸僧能く答る者無し。道安これを伝へ聞き、仏者の恥なりとて、大小の經教に亘りて三段の判釈を設く。然りと雖も、人普くこれ信ぜず。時に天竺より、親光菩薩の造る所の仏地論渡れり。彼の論を披くに、三段の分別有り。

判釈に付きて、序・正・流通の三段を分かつ事、常の義なり。B² (28)、夫れに取りても、三段を分かつ由來の事、太唐に於いて、東晋の代に帝、有る法師を請じて楞伽經を講ぜらる時、文段・科段を弁えず。其の時、帝不審にして云く、經の説相重々なり。何なる処にて何様なる法門を説き、何なる処では何等の子細を説けりと云う事これ有るべきかと覺ゆるなり。如何と仰せらる時、この法師、兔も角も分別せずつまじりたり。其の時、聽聞衆の中に、弥天の道安法師と云う人、これを聞きて不覺なりとて、歸りて一切の大小の經

所謂、一には起教の因縁分（序）、二には正教所説の分（正宗）、三には依教奉行の分（流通）。其の後、諸宗も普くこれを依用す。

^a (36) 私に云く、三段の解釈を天下の人依用する故に、弥天と名づくこと世流布の人云う事、然るべからず。弥天の釈の道安と云うは、習鑿齒と云う儒者と対面の時、彼の人は四海の習鑿齒と云い、道安は弥天の釈の道安と答るなり。世に之を名対と云う。習と釈すとは、姓なり。弥天とは四海は天地の対なり。鑿齒と道安は名なり。俱に東晋の符堅の時の人なり。

に、序・正・流通の三段を分別せり。証拠無き故に、人々これを信じず。其の後、天竺より親光菩薩の造る所の仏地論渡るなり。彼の論に起教縁起分・聖教正説分・依教奉行分として、三段を分別せり。其の後、諸の人師一同して、諸経論に三段の分別を用いるなり。其の後、天下にこれを用いば、其の名、一天にはびこる故に、弥天の道安法師と云うなり。

<p>[39] 付分別序正 流通三段、先約一 代時華嚴序分也</p> <p>一七、付序正流通 約一代事</p>	<p>△、一、別に序・正・流通三段を分かつに付きて、先、一代に約す時、華嚴は序分なり。内証の思惟にして、未だ口論の説法を出でざる故なり。</p> <p>B、阿含以下法華までは正宗。涅槃は流通なり。其の權を施すは、鹿園四諦の法輪。其の實を顯すは、鷲峰の三變の淨土なり。</p> <p>C、如来説法は広しと雖も、權實の二教を出でず。之を以て正宗と為す。涅槃は偏被末代の為に小乗の戒品を説く。之を以て統命の重宝と為す。是即ち一代の流通の故なり。</p> <p>D【惠光坊の一義】前四味共に法華の方便なれば序分なり。法華は大事の因縁出世の本懐なれば正宗なり。涅槃は上の如し。</p> <p>E【一義】法華・涅槃共、正宗と取る。二經は同じく実相な</p>
<p>△₁(66) 一、一代を序・正・流通に習う事。</p> <p>B₁(66)、【一義】爾前は序、法華は正宗、涅槃は流通なり。</p> <p>E₁(66)、【一義】在世に二段、滅後に一段と云うなり。爾前は序、法華・涅槃は正宗、滅後の四依弘經の論判、天台の御判釈等流通なり。</p>	<p>×</p>
<p>△₂(28)、夫れに取りても、序・正・流通の三段を、分別するに付きて、重々の義これ有り。先づ如来一代の説教に付きて、三段を分別する時、華嚴は序分也。其の故は、内証の思惟にして未だ口論の説法に出でざる故なり。</p> <p>B₂(28)、阿含已下法華迄は、正宗なり。涅槃經は流通なり。</p> <p>C₁(28)、偏被末代の為に小乗の戒法を説く。これを以て統命重宝と為す故なり。</p> <p>D₁(28)、【惠光坊の一義】前四味は共に法華の方便なれば序分なり。法華經は一大事の因縁にして如来出世の本懐なれば、正宗、涅槃</p>	

る仏性の理を明かし、俱に醍醐の教を説く故なり。さて四依弘経の論は、天台・妙楽の弘通を以て流通と取るなり。

F【一義】一代説教は、悉く序分なり。天台・妙楽の止観を以て正宗と為すなり。釈尊は得道の夜より泥洹の夕べに至るまで、一字も説かず。五時八教は、対機随縁の説法なれば序なり。この一字不説の法体、天台出世して止観と説き、一念三千の観門を指示したまう故に正宗と云うなり。

G【一義】一代八万の聖教、四依弘教の疏釈は、皆序分なり。正宗はマサシキムネと云うなり。衆生の一念の心性を悟る処を正宗と云うなり。此の時は在世をも滅後をも説教に及ぶ分は皆是序分なり。正く一心の本源を悟る処を正宗と云うなり。秘すべし。

槃経は流通なり。

F₁ (28)、【又同一義】

如来一代の説教は、悉く序なり。天台の止観を以て正説と習うなり。釈尊は二夜不説一字とて得道の夜より泥洹の夕に至るまで一代の間、一字をも説かずと云へり。其の故は、一代八万の藏経は、対機随縁の説法なれば、只是、序分なり。此の一字不説の重を天台出世して摩訶止観と説き、直に心の本縁を顕し玉う故に、止観を以て正宗と為す習なり。

G₁ (28)、【又一義】正宗とは、マサシキムネなり。而るに、一代八万の聖教、四依弘経の疏釈は皆序なり。衆生一念の心性を悟る処を

<p>〔40〕付法華分別 序正流通重重義有 之</p>	<p>一、法華に付きて別に序・正・流通に分かつ重重的義有り。 A、無量義經は序、法華八軸は正宗。普賢經は流通なり。 B或は又法華八軸の内に取て、三段を分かつ時は、序品は序分、方便品より分別功德品の十九行の偈に至るまでは正宗分、偈より已後經の畢まで流通と取るなり。 C【法華論】分別功德品の初めより流通に属す。 D、北地師は、現在の四信までを正宗と取るなり。これ即ち、当座聞經の得益なる故なり。滅後の五品より下は、滅後弘</p>	<p>A¹(66)、【一義】無量義經は序、法華は正宗、普賢經は流通なり。 a(66)是即ち、如来滅後に法華を修行して懺悔滅罪すべき相を説く故なり。</p>	<p>次、入文判釈の事。 B¹(34)二の分文有り。先づ一には初品は序分、方便品従り分別功德品の十九行の偈に至るまで、十五品半、正宗偈従り已後經尽くるまで十一品半は流通義なり。是を一經三段と云う。</p>	<p>B²(30)、天台の意は、一經三段・二經六段の二の廃立これ有り。先づ、一經三段の時は、序品をば序分と為し、方便品より分別功德の十九行の偈まで正宗なり。偈より已後、十一品半は、流通分なり。</p>	<p>正宗と云うなり。この時は、在世にても有れ、滅後にても有れ、説教に及ぶ分は皆是序なり。正しく心の本源を悟る処を正宗と云うべきなり。</p>
-------------------------------------	---	--	---	---	---

經の相なる故に、流通と取るなり。

E、南地師は、天台分文の如し。仍ち一家は何をも是非したまわず。然と雖も、南地師の義を専ら引用したまう。

E【疏】光宅の雲は印より經を受けたり。初めに三段あり。次に各々二を開くなり。序は謂わく、通別の序なり。正は謂わく、因門・果門なり。流通は謂わく、化他・自行なり。二の序に各々五あり。二の正に各々四あり。二の流通に各々三あり。合して二十四段なり。

F、夫れ經文を文節すること、悉く是人の情けなり。蘭菊が各々其の美を擅すごとく、後生、まさに是非を諍競すべからず。

G、【又】智者の分文に三と為す。初めの品を序と為す。方便品より分別功德品の十九行の偈に訖までは、凡て十五品半ら正と名づく。偶より後、經を尽くすまで凡て十一品は流通と名づく。

H、【又】經を分けて二と為す。序より安樂行に至る十四品は迹に約し、開權顯実す。涌出より經畢訖まで十四品は本に約し、

E¹(34) 一、此經の文節、諸師の判釈遠なり。

廬山の龍齊中の興北山の搖玄暢光宅等なり。

F²(34) 文句の中に此等の義を挙げ畢りて、夫れ經文を文節すること、悉く是れ人情なり。蘭菊各々の其の美を擅にす。後生應に是非を争競すべからず。

I¹(35) 一、三段傍正の事。妙樂大師は、今記從前三段消文と判じ、都率の先徳は一經三段分之の正意と釈せり。

b(35) 口伝云、忍界同居の化導は迂回道の機を本と為す故に、文句

<p>開述顕本す。本述各序正流通あり。初品を序と為し、方便より授学無学人記品を訖り、正と為す。法師より安樂行の訖りは流通と為し、弥勒已闍斯事仏今答之と云うに訖るは、半品を序と名づけ、仏告阿逸多より下は、分別功德品の偈に訖るは正と為すと名づく。此より後、経を尽くすは流通と為す。今の記は、前三段より文を消す。</p> <p>I、是一経三段、二経六段の二の配立の中には三段消積が正と見たり。</p>	<p>〔41〕法相人師二配立段</p> <p>A、一、法相の人師は、二の配立を設けたり。一には、方便品より人記品まで正宗と取り、法師已後一経訖を流通と取るなり。二には、不軽品まで十九品を正宗と取る。</p> <p>B、然るに、南都碩学は春日の明神に参籠し、両義の是非を祈り申す時に、神託に云、八品正宗は意に叶う。十九品の正宗は捨て難し。夫れより已後、両義共に用いるなり。</p>
<p>一部の大旨は後の機に依る時は、一経三段を正意と為すか。惣じて本述を分別せん時は、此の機に依れば、両経三段正意とも云うべきなり。然れども忍界同居の化導、文句一部の主旨は迂回道の機を本と為る心にて一経三段正意とは云うなり。</p>	<p>×</p> <p>A₁ (29)、この法華経に付きて三段を分別するに、後の人師の釈義不同なり。其の中にも法相宗は二義を存すと見えたり。一には、序品を序分と為し、方便品より人記品に至りて八品を正宗と、法師品より已後流通と為すなり。一には序品を序分と為し、方便品より不軽品まで十九品を正宗と為し、神力品より流通と為すなり。これ皆二処三会の廃立なり。</p> <p>B₁ (29)、而るに、笠置の解脱上人、この二の廃立の実不を決する為に、春日</p>

<p>〔42〕二經六段者 一八、二經六段事</p>	
<p>A、本迹二段を分かち、各序・正・流通を分別す。謂く、前十四品は、迹門に於いて三段に分かつ。序品は序分。方便より人記品に至るは正宗と取る。法師以下五品は流通と取るなり。</p> <p>B【疏八】此下五品は是、迹門の流通なり。</p> <p>C、次いで本門の三段とは、涌出の半品まで序分。仏告弥勒より分別品の偈までは正宗。現在の四信より末は流通なり。</p> <p>D、夫れに取りても、一經三段は、己心の三諦を表す。二經六段は本迹の三宝又六身門を</p>	<p>一、二經六段とは。</p>
<p>×</p>	
<p>A¹(34) 次に本迹二門を分けて、各三段を判ず。迹門には序分(序品)は、方便より人記品までは正宗、法師品以下五品は流通なり。</p> <p>C¹(34) 次に本門は涌出品の始め半品は序分なり。仏告阿逸多と云う従り分別品の偈に至るまでは正宗其れより已下は、流通分なり。</p> <p>a(34) 是二經六段とも云い又兩經三段とも云う。</p> <p>C²(30)、さて本門の三段とは、涌出の半品は、序分、仏告弥勒より分別功德の偈までは正宗、現在の四信より末へは流通分なり。</p>	<p>大明神に參籠して、祈精し玉へり。明神少女に託して云う、八品の正宗は意に叶えり。十九品の正宗は捨て難し。託宣し玉へり。其れより已来た、兩義共にこれを用ゆ。</p>

表すなり。

△、一、書写の聖空上人は夢中

〔43〕書写聖空上人夢中值金剛薩埵法華一部仏法僧三宝伝

一九、序正流通則仏法僧事

に金剛薩埵に値い、法華一部を仏法僧の三宝と伝たまへり。謂わゆる序品より法師品に至るは法宝なり。四味三教の諸教を開き、一実円融の妙法を顕す故なり。宝塔品より神力品までは仏宝なり。二仏塔中に並び、分身樹下に来集し、本地の三身は自証成道を示す故なり。さて属累已下は僧宝なり。是又一体三宝の習いなり。

×

×

D¹ (30) 夫れに取りても、一經三段は己心三諦を表し、二經六段は、六身門を表すと習うなり。

△、(31)、書写の聖空上人、金剛薩埵に値いて、法華灌頂を遂げ玉へり。この時、序・正・流通の三段を、仏・法・僧の三宝と御相承有り。序品より法師品までは法宝、宝塔品より神力品までは仏宝、属累已下は僧宝なりと御相承有り。この心は序品より法師品までは法華已前の諸經を開して一乘の妙法と顕すが故に法宝なり。宝塔品より神力品までは二仏塔中に並び分身樹下に集まる事皆仏果の上の所作なれば、仏宝なり。属累品已下は諸大菩薩等皆各この經を流通し玉う相なる故に、僧宝なり。天台の三段の分別、其の心違わざるなり。

a (31)、書写にはこの事を随分秘藏する事なり。金剛薩埵書写影向あつて、灌頂を授くなり。其の処彼の山にあり。

〔44〕序正流通三
段約観心得意時

一、序・正・流通の三段を観心に約して意を得る時。
 A【釈】空は序、中は正、仮は流通と為す。一心三観なり。
 B【弘五】一家の円義と言う。法界は須く十界と云うべし。即ち空・仮・中なり。
 C、万法皆、序・正・流通の三段にあらざる無し。三千の本覚の上、本有の三諦、妙法の三段と云うなり。
 D、或は三身に約するなり。序は不説なれば法身。正宗は智慧を以て体と為す故に報身なり。流通は衆生利益の相の故に応身なり。
 E、或は序は定なり。無量義処三昧に入るなり。正は恵なり。流通は戒なり。僧は戒を以て本と為す故なり。
 F、此の如く談ずるは皆、聖境に譲る。行人の徳分にあらず。

a (67)、観心に約して三段を云う時は、一念起は序、一念を即空即仮即中と照らすは正宗、是を自ら知り他にも示すは流通なり。
 b (67)、「一義」一念不起は序、一念生ずるは正宗、念念起きて各々の用を作す所は流通なり。
 c (68)、法体に約して三段を云う時、春、草木のもえ出んとするは序分、花咲き、菓成る

これ秘処なり。

<p>〔45〕付初序品通 序別序二有之</p>	<p>實に我ら一念不生にして分別を生ぜざるは序なり。既に青黄赤白の一念起るは正なり。法界に流るは流通なり。</p>	<p>は正宗、さて此の草木が衆生の依怙と成る所は流通なり。</p>	<p>×</p>
<p>二〇、通序別序事</p>	<p>A、一、初めに序品に付きて、通序・別序の二、これ有り。 B【疏】通序は諸經に通ず。別序は別の一經なり。 C、如是等の五義は諸經に通ずる通序なり。現瑞放光の化儀、二聖の問答の粧、別に今經に限る故に、別序なり。 D、但し之に付きて通序の別序、別序の通序と云う事、これ有り。 E、先、通序の別序とは、【疏】如是の詮は異、我聞の人は異、一時の感応は異、若干の聴衆は異なり。五義に亘りて異字を置くこと甚深なり。如是と云うも權実の不同これ有り。爾前は權法、法華は実なり。今の經の心は、諸法実相の法</p>	<p>a (55)、序とは之に於いて、通別の序、発起の序、証信の序、或いは序序、言説の序、無言の序などあり。 C、(55)、先づ通序とは、如是我聞等は諸經に通ずる故に通序なり。或は人を列るを云うなり。 D、(55)、さて爾時世尊と云より下は別序なり。又は通序即別序、別序即通序と云うことあり。 E、(55)、之に於いて、通序の五義、別序の五義あり。是を別序と云うは、玄をば如是詮異、我聞人異、時者感応異、仏住処異、若干聴衆異と云うなり。是即通序の五義は諸經に亘れども、体は不同の故に、五義共に異の字を置くなり。是を通序・別序と云うなり。委くは下に</p>	
	<p>A、(23)、又序に於いて、通序・別序これ有り。 B、(23)、【釈】通序は諸經に通じ、別序は今の經に通ず。 h (23)、別序とは、四花六動等なり。是は法華に限るなり。 i (23)、さて余の序は諸經に通ずる故に通序は諸經に通ずと云うなり。 A、(32)、初の序品に付きて、又通序・別序の二つこれ有り。 C、(32)、如是我聞などの五義は、法華に限らず、諸經にも通ずる故</p>		

体を挙げ、如是と云う故に詮は異なり。又、我聞人異とは、能聞の阿難に於いて大小不同なり。爾前は小乗の阿難なり。今円機純熟は大乗の阿難なり。一時とは、『釈』時は感応を義と為す。』爾前は能所各別の感応、三世隔異の時なり。今は能所不二の感応、出過三世の不思議の時なり。仏住と云うも、爾前は三身各別の応身、法華は三身即一報身の所説なり。若干聴衆異とは、爾前は未熟の権機、法華は純熟円機なり。五義に亘りて法華は爾前に同じからず。故に異字を置くなり。故に通序の別序と云うなり。

F、次に別序の通序とは、爾前の諸経にも当分の現瑞表彰等これ有るの故なり。

注す。

F¹ (55) さて別序即通序と云うは、妙経の如くに諸経に無けれども、当分当分の集衆現瑞これ有り。故に爾か云うなり。

B¹ (56) 釈云、通序通諸経〇一經矣。

b (56)、之に付きても、余経は未開会なり。何ぞ通序は諸経に通ずと云うや。云うに名は通じ、義は通じずと習うなり。

c (56)、次に発起の序とは、今の経には文殊・弥勒の発起して、序分の化儀を問答し、一会の衆に聞かしむと云うなり。

d (56)、次に証信の序とは、阿難我一人聞かざるのみに、余人も此の如しと云て、同聞集、

を挙げ、一会の衆に信を証ぜしむを云うなり。

e (56)、次に、庠序と云うは、東方作が序を作る時、羊来る故に此の羊によそえて羊序と作るなり。其の後、秦の始皇の代に、羊序と云える病有る故に、聞悪しとて庠と

に通序と云うなり。さて現瑞放光の化他の二聖の問答の粧いは、別して法華に限る故に別序と云うなり。

D² (32)、但し、これに付きては、通序の別序、別序の通序という事これ有り。

E² (32)、先づ、通序の別序と云うは、『疏』如是の詮異に我聞の人異に一時の感応異に仏住の住所異に、若干の聴衆異に判ぜり。諸経にも通じて有る序なれども、而も法華と諸経と異なるを通序の別序と云うなり。

F² (32)、さて別序の通序と云うは、法華以前の諸経にも当分の現瑞表彰などはこれ有る故に、別序なれども、又

〔46〕就通別二序
重々不同有之

一、通別の二序に就きて重々の
不同これ有り。
A、一、通序は阿難の序なり。
如是我聞は阿難の語なり。別
序は如来の序なり。入定放光
等、皆是仏の示現の故なり。
B、二、通序は滅後の序なり。
証信序の故なり。別序は在世
の序なり。
C、三、通経の後の序は滅後に
之を置く故なり。別は経前の
序なり。
D、四、通は証信序、別は発起
序なり。
E、五、通は無言説の序、別は

付くるなり。
f (56)、次に、言説の序とは、二聖
問答(迹門)、無言説(本門)は四
花六瑞なり。
g (56)、【一義】無言説は迹門理性
不二の序なり。言説は本門隨緣真
如の序なり。事円三千の序なり。
*(57) ↓ (28)

* ↓ (55)

A₁B₁C₁D₁E₁ (39)
一、通序をば、阿難の
序とも、滅後の序とも、
経論の序とも、証信の
序とも、無言説の序と
も云い、別序をば如来
の序とも、在世の序と
も、経前の序とも、発
起の序とも、言説の序
とも云うなり。是の如
き不同有るとも、一心
不生にして方法に咎無
き重なり。
F₁ (39) 惣在一念は通
序、別分色心は別序、

A₂ (32)、夫に取りても、
通別の二の序に付き
て、仏に約し、阿難に
約して重々の不同これ
有りともこれを略す。
F₂ (32)、所詮、一心不
生の本源、惣在一念な
るを通序と云うなり。
我等が一心と云うは、
方法に無用を通じる故
なり。別序と云うは、
念々縁起の当体三千の
方法歴然なるを別序と
云うなり。仍て、我等
が行者の一心と法界の

諸経にも通ずる故な
り。

[47] 文段事

言説の序なり。二聖問答は、言説故なり。
 F、此の如く重重不同なれども、一心不生の本源は総在一念なるを通序と云う。念念縁起の当体三千歴然なるを別序と云うなり。通序は一念、別序は三千なり。
 一、文段の事。
 A、初め如是より退座一面に至るを通序、爾時世尊より品訖るまでは別序なり。
 B、初め通序に付きて五義有り。謂いて、如是は所聞の法体等なり。【疏】如是は所聞の法体を挙げ、我聞は能持の人なり。一時は聞持和合にして、異時にあらざるなり。』一時とは仏より聞くなり。王舎城・着山は聞持の所なり。与大比丘衆は、聞持の伴なり。
 C、此の五義を開きて六義七義と分別するなり。六義の時、

×

又は通序は一念、別序は三千なり。
 A₁ (37) 一、序に於いて、通別有り。如是我聞より退座一面に至るまでは通序、尔時世尊四衆困遶より品終わるまでは別序なり。是をば通序通諸経、別序別一経と釈して、如是等の五義は諸経に通ずる故に、通序と云い、集衆現瑞等は、別して此の経のみに有り。故に別序と云うなり。
 a (37) 然りと雖も、通序は名は通ずるとも体は

諸法と和合して、一体不二に顕ずる処を、法華の正宗とも云い、成仏とも云うなり。
 A₂ (33)、文段の事。初め如是我聞より退座一面に至る迄は通序、尔時世尊より品終わる迄は、別序なり。
 B₂ (33)、初めの通序に付て、五の義有り。謂ゆる如是とは所聞の法体、我聞とは能持の阿難、一時とは法華の感応、仏住とは能説の教主、与大比丘衆とは、同聞衆なり。
 C₂ (33)、この五義を開して六義・七義とする

	<p>我聞を開きて二と為すなり。我は能持の阿難、聞きて一会の大衆なり。また我聞は、我は能聞、聞は所聞なり。</p> <p>D、七義の時は仏住を開くなり。仏は能住、住は所住なり。依正の不同なり。</p> <p>E、夫れに取りても、初め如是は法華一部の所聞の法体なり。</p> <p>F【記】始末の一經を所聞体と為す。</p> <p>G【弘決五】通は一部を指して、以て所聞と為す。法華經の如し。</p> <p>H【疏】如是とは、信順の辞なり。信は則ち所聞の理會う。順は則ち師資の道成なり。』仏の所説を信じ、教の如く隨順すれば、師弟の道成る。感応、自ら道交なり。信順の義無ければ如是と云うべからず。</p>
	<p>別なり。別序は事別に於て義通ず。義通ずる故に、通じて別序有り。体別なるが故に別して今經に在り。仍て今經は別して一仏乘に在る故に、通別俱別なりと云うべし。</p> <p>B¹(38)一、通序の五義とは、如是は所聞の法体、我聞は能持の人、一時は聞持和合の時、仏は能説の教主、王城耆山は聞持所、之を合して一と為す。与大比丘は聞持の伴なり。</p> <p>C¹D¹(38)六義の時は仏と処とを開し、七義の時は、我と聞とを開くるなり。</p>
	<p>なり。六義の時は、我聞を開きて六と爲るなり。我は能持の阿難、聞は一会の大衆に亘るなり。</p> <p>D²(33)、七義の時は、仏住を開きて二と為すなり。仏は能住の正報、住は所住の依報なり。この五義は何れも一々に沙汰有るべきなり。</p>